no.29

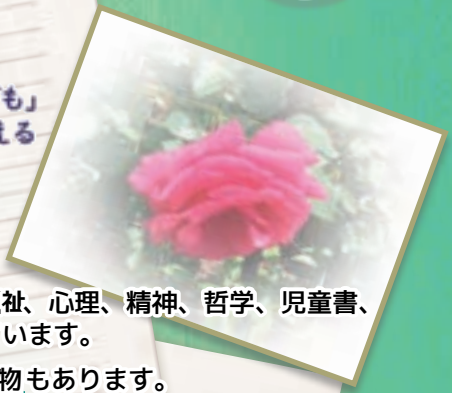
CLCからしだね書店便り

May 2023 5

＊今月のご案内＊

① 『ジョージ・ミュラーと
キリスト教社会福祉の源泉』

② 座談会
「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」
について考える



ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル
営業時間　11:00~17:00
定 休 日　日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第３木曜日は書店のみ営業

こどものための神のものがたり

語る人：大頭　眞一

第5回　バベルのとう

神さまは心配だった
バベルのまちで大工事が始まったから
えらい人たちが　みんなを働かせた
農家のひとも　職人さんも
すると
食べるものが足りなくなってきた
靴や着物も足りなくなってきた
みんなは怒りっぽくなってきた
ある日など
高い塔から落ちて
しんでしまった人もでた
神さまは悲しかった
もうおしまいにしよう、そう思った
ある朝
みんなはえらい人がなにを言っているか
わからなくなった
それでみんなは、
自分のしごとにかえって行った

大頭　眞一　おおずしんいち
1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ（BA、MA）と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師、焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。

おとなのための　神の物語

子どもだったみなさんへ

●1
天まで届く高い塔。でも、それを見に神さまが降りてこなければならなかったのは皮肉ですね。けれども人間たちにとって、それはたいへんな重荷でした。

●2
支配者たちは一致と団結することによって、軍事的、経済的な安定を得ようとしました。神さまの胸の中でいきるのではなく。

●3
ところが、人間のつくる制度、組織、建物は、人間を画一化し、歯車のようにしてしまうようです。人間らしさを奪ってしまうのです。

●4
ほんとうの一致と団結はペンテコステの日に実現しました。聖霊による一致と団結。神さまの胸の中で愛し合う一致と団結です。

和紙ちぎり絵：森住　ゆき　もりずみ　ゆき
群馬県生まれ。和紙ちぎり絵作家。著書に画文集「アメイジング・グレイス」「ぶどうの気持ち」「日めくり片隅の花でも」（いのちのことば社）、「思いを伝える和紙のちぎり絵春夏秋冬」（日貿出版社）がある。埼玉県在住。

「読書感想本」

『ジョージ・ミュラーとキリスト教社会福祉の源泉 ―「天助」の思想と日本への影響―』

木原活信 著（教文館） 4600円＋税

"偉人"ではない「孤児の父」の生涯は私たちに何を語るか？

横書き300ページの研究書。これだけで、どうぞ引かないでください。

日本の福祉は、この20年余りの間に大きく変化しました。良くも悪くも、です。2000年前後の「社会福祉基礎構造改革」あたりからだと思います。確かに、当時、それまでの制度の矛盾や問題が噴出していました。これでは急速な高齢化に対応できないと、介護保険が始まったのが2000年です。福祉は「サービス」であり、措置（お役所の"処分"）ではなく、契約で利用されるもの、といった発想が主流になりました。経済合理主義の潮流が、そうした変化の底に流れていたと思います。個人の尊重とか、介護の社会化とか、地域福祉の促進とか、良い面もたくさんありました。でも、そこには大きな落とし穴がありました。

このところ、市場原理主義的な「福祉」が幅を利かせてきたというのが実感です。からしだね館には、こんなDMがしばしば届きます。いわく「稼働率100％保障の就労支援経営セミナーご案内」「資金ゼロから始めるグループホーム指南」。福祉が、変にゆがめられています。逆に言えば、福祉というのはいったい何なのか、それが今ほど問われている時代はない、ということでしょう。

もうひとつ思うことがあります。

それでは、キリスト者として福祉をするとはどういうことなのか、ということです。「キリスト教福祉」とひとことで言いますが、いったいその中身は何のか？クリスチャンがやっていれば、それで「キリスト教福祉」なのか？これについても、現場の実践はいろいろあって、じつは私はおおいに考えさせられています。それぞれの福音理解や教会観にもよるのでしょうが、でも、例えば成果成功主義的な「キリスト教福祉」は、率直に疑問です。

そのような中で、本書は、あらためて、キリスト教社会福祉の「源泉」を尋ねる旅に私たちを導いてくれます。山室軍平、石井十次をはじめ日本の社会福祉の歴史の中で、キリスト者が担ってきたものは決して小さくありません。彼らが強く影響を受けたジョージ・ミュラーとは、いったい何者だったのか…。

【理事長　坂岡　隆司】

2023年4月30日号クリスチャン新聞に同書の書評を投稿しました。以下は、その文章です。

レビュー　クリスチャン新聞　8

Review

「はらかずも」で紡がれた物語

ショージ・ミュラーといえば、祈りによって一万人の孤児を養った信仰あつきキリスト者であり、だれもが知る偉人伝中の人物である。しかし、本書では、失敗も弱さも脆さもある、ごく普通の人間ミュラーの姿が描かれている。

ミュラーの実像を浮き彫りにする中で、彼の中でキリスト教信仰と実践がどう結び付き展開していったのか、丁寧に分析考察されている。ミュラーは著者長年のテーマだそうだが、そのごとく相当手のかかった研究書である。さらに、山室軍平や石井十次ら、日本においてミュラーの影響を受けて活躍した巨人たちの生涯を丹念に追った記述も興味深い。その意味で本書は、神の前に真実に歩もうとした信仰者たちの、いわば求道の物語でもある。

普通の人であるミュラーの生涯を、著者は「はからずも」という言葉で繋ぎながら語る。人や出来事との出会い、試練や苦難、その時代に生まれ合わせたことも含め、すべては「はからずも」である。「はからずも」の中に、神の見えざる手を見ると著者は言う。

社会構造が劇的に変化し、様々な矛盾や問題が噴出した時代にミュラーは生きた。コレラパンデミックに苦しみ、悲惨な戦争に怯えた。私たちが生きる今の時代とも重なる。

ミュラーは、既成の組織を疑い、安定した職を捨ててまでも、真実な生き方を求めた。彼は、情緒的であるよりも、「神の栄光を孤児事業において現わす」ことに重きを置いた、と著者は考察する。借金はしない、募金広告もしない。これらを俗的なものとして、ミュラーはかたくなまでに遠ざけた。その仕方がそのまま現代にあてはまるかどうかはさておき、かくまで純粋に神にのみ頼ることを貫いた姿には襟を正される。著者はこれを「天助」の思想と解説する。神とともに紡がれた物語は、今を生きる私たちに問いかける。教会は社会の困難にどう向きあっているか。信仰者として私たちはどう生きるのか。キリスト者として福祉をするとはいったい何なのか。

【評・坂岡　隆司＝社会福祉法人ミッションからしだね 理事長】

オンライントーク会　2023年5月5日（金）

「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

5月5日こどもの日に、からしだね書店では、「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」をテーマにトーク会を行いました。特定の宗教を持つ親のもとで生まれ育った人たちが受けた虐待やこころの傷が問題視されるようになった今日、トーク会では、いわゆる「宗教二世（クリスチャン2世）」として生まれ育った人や、クリスチャンの親として子どもを育てた人の思いに耳を傾けながら、様々な考えを出し合いました。この集まりの目的は、誰かを裁くことでも、正解を求めることでもありません。子どもたちが、家庭や教会の中で安心して育つためのヒントになることを見つけられたらいいなと思います。

CLC書店員さん（３世　傍聴のみ）

このトーク会では、キリスト教家庭外からクリスチャンになった人を1世、クリスチャンの親に育てられた人を、2世、3世、4世…と呼んでいます。

自己紹介

コンチ：私はミッションからしだねで働くクリスチャンです。母だけがクリスチャンの、いわゆる「かたクリこ」です。私の家庭は、母が家族をリードする大黒柱で、父はソフトでおだやかな人です。弟もいますが、母は私だけを強引に教会に連れて行きました。私は多少強引なことをしても大丈夫な子と判断されていたようです。小さい頃は教会学校が楽しかったのですが、高校生になってからは、母との喧嘩がいやなので、行けるときだけは行っていたという感じです。母親への不満というか、強制されている感覚が大きかったと思います。大学卒業後、物理的に親と離れて一人になった時に、やっと「自分と神」の関係を考えるようになりました。また、からしだねで目の前の人を通して「いのちとは何なのか」「生きるってどういうことなのか」を思いめぐらすようになり、自分はどうやって生きていくべきなのか？神様ってどういう人なんだろう？と知りたくなりました。

ブル：私は今回、店長さんの「地獄に落ちないために、がんばる子」の「罪」の意識という部分に関心をもって、参加しました。

私は牧師家庭に育ったいわゆる「宗教二世」です。教会学校の教師もしています。今はすでに天国にいる父は、戦争に行く一歩手前で命が助かり、生きる意味を見失ったときに、神様に出会ってクリスチャンになり、その後、牧師になりました。母もクリスチャンです。私が信仰を持つことを両親が祈って待っていてくれたということを知って、中学のときにはっきり神様を信じるという経験をしました。聖書を開くことが嫌だった時期もありましたが、うちの場合は「とびらを開けたら教会」で、行かない選択がなかった。父は真っ直ぐな信仰者だったので、日曜日の部活も参加せず、「どうして私だけ」と反発も感じましたが、後でそういう育ち方を、自分でもよかったと思っている部分もあり、全部は否定できないなという気持ちがあります。

レンコン：私は1世です。田舎の限界集落のようなところが実家で、近所のおばあちゃんがやっていた「聖書を学ぶ会」みたいな集まりに祖母が招かれて、私もそこについて行きました。そこのおばあちゃんは、通学時にも優しく声をかけてくれる人で、子どもながらにとても良い印象を持っていました。私自身が教会に初めて行ったのは大学生の時です。ラジオのキリスト教番組で紹介してもらった大学の近くの教会を訪ね、そこで信仰を持ちました。ごくごく自然にというか、神様の方が呼んでくださって、私もそれに応えて洗礼を受けて…という感じです。みんなに可愛がられて素直に信仰を持った2世3世の人がたくさんいる教会でした。教会の中は、親族関係者が多く、子供たちや若い人がいっぱいいて、私は2世3世のパワーに圧倒されるような感じでした。クリスチャンの家庭にも招いて下さり、楽しく過ごさせてもらいましたが、食前のお祈りなど、どうふるまえばよいのか戸惑うことも多かったです。それで、クリスチャンホームとそうでない家庭の違いがあるんだなと思いました。教会との関わりが長くなると、教団の中での2世とそうでない人で、権力や立場の差みたいなものを感じることが無くもなかったので、信仰が正しく伝わるってどういうことなのか、考えたいと思います。

配達人：私は四人兄弟の三番目で両親ともにクリスチャンです。親戚がいて、友達がいて、楽しい場所としての教会に通っていました。ただ中学高校と、自分の世界ができてくると、「行かなければいけない教会」という感じになりました。コンチさんと同じで、親元から離れた時に、「自分と神」の関係を考え、自分自身の個人的な信仰について考えるようになりました。子ども時代は兄弟がわちゃわちゃいるような家だったので、ご飯の前のお祈りが終わった瞬間に、「お兄ちゃんがお祈りの最中に目開けてはったわ」と親に告げ口し、兄から「おまえも目開けてたってことやないか！」というような、兄弟間裁き合いの子ども時代で、「祈り合って支え合って」というような美しいことはいっさいなく、兄弟げんかでは「おまえが悪い。はい、地獄行き！」みたいな悪口が飛び交う感じでした。（笑）

ネブ：私はキリスト教の背景のないところから、高校生の時にクリスチャンになったものです。ギデオン協会の聖書が家にあって、それを中学生のときに見て興味があり、高校生になって、人生に悩むというか、悶々としていた時に一枚のチラシをもらって教会に行き、クリスチャンになりました。でもそれからも反発しながら「洗礼は受けたが自分は信仰者ではない」と思ったり。「まとも」になりかけたのは社会人になってからかなと思います。今日は私とは全然違う環境の中で育ってこられた2世の皆さんの心理状態、思いがどんなふうだったのか興味がありお話を伺いたいです。

ツラノ：私の立場は、2世か3世か4世か？とにかく親戚にクリスチャンが多い環境に育ちました。配達員さんと似ていて、教会にはよくしてくれているお兄さんお姉さんみたいな人たちいっぱいいて、サッカーなどのスポーツを一緒にやったり、当時流行っていたポケモンカードを一緒にやったりして、そういう楽しかった思い出がいっぱいあります。一方で、ちょっと行きたくないなっていう気持ちになった時に、「行かなあかんやろ」と正面から強要されるというより、「周りが悲しむ」とか「神様が悲しむ」とか、そういう空気を子どもながらに察知して、自分の行きたくない気持ちや感情をまともに話しても、とりあげてもらえないような気がしていました。実際に「行きたくない」と親に言ったこともありますが「そんなん言うたら、教会学校の先生悲しまはるわ」とか言われて、がっかりした顔をされました。そんな感じで、教会にはネガティブな思い出もポジティブな思い出もあります。今も、クリスチャンを続けていますが、いろいろ疑問に思ったりすることもあり、常に考えながら信じているという感じです。

店長：私も両親がクリスチャンです。当時、私の教会では、教会学校が終わると、子どもたち

オンライントーク会　2023年5月5日（金）

「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

は放し飼い状態になって、大人が礼拝をしている間、みんなで教会の周辺を遊びまわっていました。それがものすごく楽しかったので、子ども時代、教会に対する嫌な思いはほとんどありません。でも、キリスト教の教えの中で「死と裁き」という話が出てきますよね。イエス様を信じて罪を許された人は天国に行けるけれども、そうでない人は天国に行けませんと。それは「教義」として教えられるわけです。大人からすると子どもたちも救われてほしいという思いがあっての「教義」を教会で教えているだけですし、悪意があるわけでもないのです。ただ子どもにとっては、自分が天国に行けるかどうかは大問題で、私は罪許されぬままに死ぬことがとても怖かった。周囲のクリスチャン家庭に育った人たちも、洗礼を受けた動機が「天国に行くため」という人はけっこういたように思います。それに比べて、「人生に悩んで」「本当の生き方を求めて」信仰の道に入ったという話が、クリスチャン家庭以外から信仰を持った人からは出てきます。なんだか踏むべきところを踏んで、ちゃんとクリスチャンになったっぽい。でも私はただただ「天国に行けるようになりたかった」それだけ。「ちゃんと」というところを通らずに洗礼受けちゃったみたいな、後ろめたさみたいなものがつきまとっています。ただ、その後のいろいろな人生経験を通して、信仰を持ってよかったと思うことは多くて、今もし信仰のない人生を歩けと言われたら、そんなことは私にはとてもできないと思っています。

今起きている「宗教二世問題」について思うこと

……クリスチャン1世と言われる人の「強烈さ」は、どこからくるのですか？

店長：さて、統一教会から始まって、今ものすごく叩かれているのがエホバの証人ですね。安倍首相襲撃事件がいつのまにかエホバの証人の二世問題にすり替わっていて、政治家と特定の宗教団体との利害関係という本質の問題が置き去りにされているのが残念です。でも、私たちクリスチャンもまた、これを機に、教会の中、家庭の中で、子どもたちに対してやってきたことの中に、反省したり評価したり、整理すべきことがあるのではないかとも思います。じつは、「親からがっかりした顔された」と言っているツラノさんの、その親というのは私のことでして…。そのあたりの親子間の本音、親に対してどう感じていたかを、出してもらうのも面白いかも…と思っています。かく言う私は2世の立場でもあり、親から受けた教育の一部をそのまま子どもにやっちゃったみたいなところもあって、3世の目にどんなふうに映っていたのか、こわいような知りたいような申し訳ないような気持ちです。

配達人：宗教二世問題についてですが、統一教会やエホバの証人でもそうですし、今日の集まりもそうですが、2世と言われる立場の人の方から、問題意識をもって発信していますよね。でも本当に考えるべきは1世の人たちなのかなと思います。1世がクリスチャンになったときの強烈な体験とか、自分の中の強烈な変化を実感しているがゆえに、その実感を子どもたちに知ってほしい、つないでいきたいという思いがものすごく強いように感じます。でも2世世代にその強烈さを求めてもピンとこないです。そのズレの隙間に生じる2世のネガティブな気持ち。1世の2世へのアプローチに、強制や他の選択肢を許さない束縛がなかったか？自分の意志で選択して信仰者となった1世が、最初から選択の幅が小さかった2世にどういう伝え方をするのか？

店長：自分が家族の中で初めてのクリスチャンになった方、いかがでしょう？

レンコン：そうですね…、なんというか、私にはあんまりクリスチャンになって強烈な変化や体験があったということはなかったかな？教会とは無縁なところにいましたが、空を見ても「こんなにすごい自然のいろいろなものは、誰かが意志をもって創ったんだろうな」と思っていたので、「創造主の神」と聖書の中で言われていることがとてもしっくりきて、「ああ、それが神様なんだろうな」と、自然にそう思いました。生きて来た延長で自然に求めていたものがここにあった、という感じです。だから神様に関する強烈な価値観の変化はなかったです。神様に関してはそうなんですが、教会については、今まで自分が生きてきた世界とは違うなというのはすごく感じました。知れば知るほど教会って不思議なところだな、というのは、今も若干ありますね。

同じ一世でも、時代背景や文化が違えば、違ってくるのかな？体罰が教育としてまかり通っていた時代。その時代の価値観から離れられず、それが信仰的で効果があるという思い込みから離れられない人たち。

店長：私は配達員さんの「一世の強烈さ」というのは、時代背景とか、文化的な背景の違いにも由来するのかなという気がしていて、同じ一世でも、時代背景や文化が違えば違ってくるのかなと思います。私や配達員さんの親の世代は、それまでの「国のために個人がある」というような価値観が総崩れになって、戦勝国から入ってきた新しいな価値観としてのキリスト教を、みんなが興味をもって求めた、熱烈さ、激しさのある時代でもあったのかな？そういう世代の人たちと私達の世代とでは、信仰を求める感情の激しさに、大きな温度差があるのかなという気がするのですが。

ブル：私達が学校教育を受けた時代（1960～70年代）は、普通に体罰が当たりまえみたいな時代で、子どもを厳しくしつけて当り前、先生が生徒を叩いても親は「どうぞ、どついてやってください」、生徒も「あ、先生、また、どついてはるな」と、体罰が問題視されなかった時代です。若い人はびっくりするかもしれませんね。今、エホバの証人の話を聞いて驚くのは、時代が「体罰はダメだ」というふうに変化しているのに、まだそれをやっていることです。ある意味、昔からの教えにとても忠実です。私は教会で体罰を受けたという記憶はないのですが、エホバの証人では礼拝での態度が悪ければムチでたたくというような恐ろしいことを今も続けている。その違いってどこにあるんでしょう？「聖書にそう書いてあるから（注※蔵言13：24、23：14など）」という理由で意義を感じてやっている。でも結果として、子どもに恐怖を植え付けることになり、なぜかまだそれをやっています。なぜなのか、本当にわかりません。自分も子どもに厳しくしたことはあります。良かれと思って叩いたこともあります。大人になってから、「いい親でなくてごめん」と謝りました。子どもは「こちらこそ、いい息子でなくてごめん」と言ってくれました。最近の問題の大きな疑問は、それが信仰的で効果があると思い込み、固執し続ける、それが一番良いことだと思い続けることの怖さです。

配達員：「神第一」という言葉が、何より優先された教会の話を聞きますが、その意味は、家庭を顧みず、家族や子どもをほったらかしにしてよいということではなかったはずだと思います。決められたルールに従うことが優先されて、子どもがどんな思いをするのか考えられていない。教会に若い人がたくさんいて、熱かった時代には、そういうこともあったのではないでしょうか。

明らかな体罰で支配するのはわかりやすい。でも戦後教育を受けたクリスチャンの親が

オンライントーク会　2023年5月5日(金)

「宗教二世」と「クリスチャン家庭の子ども」

おちいりやすいのは、善意でしかない優しい言葉で、子どもの立場や優しさの上にのって、じわじわ圧をかけてコントロールしてしまうところ?

ツラノ：時代的な違いという視点は興味深いです。体罰も、熱烈な信仰観みたいなものもないなかで育った子は、そのかわりに何を感じているか?私は教会学校教師もしていたのですが、親が不機嫌になるからとか、周りが悲しむからとかいう理由で、大人の言うことを聞いている子どもは多かったように思います。子どもにとっての親は無条件に大切な存在。親が好きだし、親に愛されたい。親は、子どもの年齢が小さければ小さいほど、自分の存在を揺るがす絶対的な存在になります。その存在を悲しませたくないので、子どもなりの優しさで親の期待に沿うことを言ってしまう。そういう子をみてきたし、自分もそうだったと思います。体罰はあきらかにダメです。でも、それがなければ解決するのかというと、そうでもない。大人が明らかにおかしいことをしていた方が、はっきりしてわかりやすい。「それ、体罰です。押し付けです。強制です。虐待です」の方が反発しやすいのです。世論も味方につけやすいです。でもソフトに、やさしさや愛、悲しい、という言葉で、じわじわ圧をかけてくる方が、わかりにくくて反発しにくい。複雑ですね。

店長：ツラノさんの一言一言が、身にこたえますね。(笑)体罰で子どもを支配して言うことをきかせようとするのか、巧妙にというか、「誰かが悲しむ」とか、「あなたのためを思って」という優しい言葉で子どもを縛っていくかの違い。後者の方がわかりにくいです。と言うのも、ツラノさんの祖父でもある私の父は、いわゆる子ども時代に戦中の体罰教育も受けた「オレは男だ!親だ!家長だ!」的な考えを、聖書の言葉(「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい」)と単純に絡み合わせて解釈していたクリスチャンだったと思うのですが、自分の感情にまかせて子どもを怒っていました。私は戦後の民主教育を受けているわけで、子どもながらに「その聖書解釈は違うやろ!」「それでもクリスチャンか!」と父を裁いていました。ですから信仰を持つということと親が正しいということは全く別のことと思って大きくなりました。親への反発心はあっても、親を喜ばそうという気持ちはいっさいなかったので、自分の子どもが私の顔色をうかがっていたということを知って「ええっ?そうなん?私の中には、それはない」と思いました。

親に反発した私。それでも、子どものころ、親に「打ち込まれたもの」に支えられ、自らイエスを求め、親から離れて、イエスに戻っていった私。

コンチ：私の母親も反発しやすかったです。めちゃくちゃなことを言っていた。それで、早い段階で親の信仰と自分の信仰をチョキン!と切り離した。それはよかったと思います。ただ、小さな子どものなかには、それが親なのか、教会学校だったのかわかりませんが、確かに「打ち込まれたもの」があります。アメリカに留学したとき、親とは無縁のところに行き、子どもの頃に打ち込まれた神の存在がこれほどまでに大きいのかと実感しました。一人で孤独になったときに、「打ち込まれたもの」を確認していく作業をしました。親と関係のないアメリカでの教会生活の基準は、私が子どもの頃に親や教会学校で打ち込まれたフォームでした。良い意味で、私は親から離れてイエス様に戻りました。そこを求めていったのは打ち込まれていたものがあったからです。

店長：お父さんはクリスチャンでなくて、お母さんがクリスチャン。そのバランスのなかで、コンチさんの立ち位置は?

コンチ：母に怒られて父の胸で泣くという役割分担。母は感情の激しい人だったので、父がクリスチャンでなかったから救われた、というのが実感です。母がクリスチャンであるということで、すでに「かたクリこ」ではないくらいの、母親の存在感。そして父は今も変わらず、ソフトでおだやかで、クリスチャンではないです。

店長：統一教会なんかでは、妻が信者、夫が信者ではないという夫婦間で家庭が崩壊していったという話がありますが、コンチさん家は、お母さんが強かったが、お父さんはそれに優しく合わせ、バランスをとっていた?

コンチ：そうですね。父はクリスチャンではないのに、キリスト教でいうところの「愛の人」でした。

1世が教会に行って初めて感じた、教会独特の不思議なものって、なんですか?そこには、日本人特有の、刷り込まれた何か、が、混ざり合っていませんか?

店長：レンコンさんは、教会独特の不思議なものがあるとおっしゃっていたが?そこをもう少し聞かせてください。

レンコン：クリスチャン1世2世とは別に、教会はひとつの家族でもありますよね。そして、教会の中で、年長者、長老に従うべきというのが、言わず語らずあります。魅力あるクリスチャンの先輩に憧れみたいなものをもって、「ああいうふうになりたいな」と思うのは良いですが、一言でいうと、教会の中にはパターナリズム(家父長制的な権威主義)が生じやすいという感じがします。同世代のクリスチャンのなかには、「こどもに自由に選択させたい」と言いつつ、「うちの子、教会に行ってくれない」とこぼす友人とかもいます。「だからと言って、力づくで行けというのも違うしな」と、ぐるぐる悩む。「クリスチャンになったらこうすべき」と思ってやっていたことに、今では後悔している1世の友人もいます。大学生活をクリスチャン仲間で集まって過ごしていて、それがよかった部分もあったが、もっと視野を広げて、クリスチャンコミュニティ以外のところでもっと経験を積みたかったと。あと、10年前のバングラデシュでは、学校にムチが置いてあってお仕置きは当然でした。宗教だから、ということではでなく、一般的に子どもの教育方法は、考えていかなければいけないのかなと思います。

配達員：キリスト教徒だから、とかではなく、日本のキリスト教徒の中には、やっぱり良くも悪くも日本の文化的素地が刷り込まれているのだろうと思います。家に縛られる考え方とか、家訓があって妄信的に教え込まれるとか、日本独特の「家」的なもの。私は日本を離れて外国で過ごした時期、外国の教会の方が息がしやすかったです。信仰をもっていれば解放される、自由にされると教えられていたが、日本の方がいろいろなものにがんじがらめの信仰だったように思います。教会のなかでいろいろな人の顔を見ながら、あるべきクリスチャン像を目指していた。外国にいたときは、クリスチャンの自由な姿、人を縛り付けるものがなく、自分が幸せになる、人を幸せな気持ちにさせるということに、心を配っている姿をみて、自由さを感じ、楽でした。日本で育った人が持つものの考え方の傾向や価値観、育ちの中での個人的価値観が、宗教観や信仰にも落とし込まれ、親は、それも含めて子ども達に「これこそキリスト教」「これこそ信仰」として伝えているかもしれませんね。

店長：宗教二世問題や、クリスチャン家庭の子どもの育ちの問題を考えるときに、大事な視点かもしれませんね。

この続きは次号に、まだまだ続きます…

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本・献金感謝】

井筒桂子様、大藤知左様、大月康子様、元森淳子様、匿名様（順不同）

4月の古書の収益は 16,134 円でした。【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】**献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。**

編集後記

◆今年のゴールデンウィークは、コロナ禍での制限が緩和され、各地ですごい賑わいだったとか。皆さまはどのようにお過ごしでしたでしょうか？からしだね書店は、いつもと変わりなく営業していました。カフェも含めて、毎年この時期は、ゴールデンウィーク前半から半ばまではお客様が少なく、最後の一日にお客様が集中します。皆さん、遠出も含めたメインイベントを終えて、「お茶でもしがてら本を探しに行こうか」ということなのかもしれません。◆新しい本を探し、ランチして、書店近くの山科川沿いや随心院や醍醐寺、勧修寺をぶらぶら散策に行って、また書店に戻って、お茶して、地下で絶版になった古本を探して…立ち読み（座り読み？）して…というように、ほぼ一日かけて、ゆっくり過ごしてくださる方もいます。◆書店周辺も含めたミニテーマパーク（！？）ＣＬＣからしだね書店へ、どうぞお越しください！【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ　075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりのバックナンバーはこちらから